

健康、新年祝福之类、甚至在镰仓宫还有将个人身体健康的祝愿写在小人身上，而这与中国民间信仰中强调许愿的私密性大相径庭。笔者曾于2010年对冀中地区的三皇姑信仰进行调查，不少信众在受访时均表示不能将其所许的愿望说出，否则就不灵验了。

尽管在日本存在神佛之争，宗教信仰的合法地位始终得到认可，且神职人员的身份被主流社会接受。明治时期对神道系统建立是建立在对民间信仰吸收的基础之上，表明

日本政府对宗教作为权力文化网络的作用是认可的。对比之下，中国始终将民间信仰排除出去，对自身合法性的诉求成了中国民间信仰主要任务。在此背景下，也就出现了诸如范庄龙牌会被冠名为中国龙文化博物馆的滑稽剧，而找不到合法性的民间信仰场所之能如铁佛寺庙会一般消失于政府的推土机下。而在这一过程中，却忽视了民间信仰的基本作用。事实上，在一个越发刚性的社会中，民间信仰在民众生活中具有重大的意义。

二大演劇総合誌から見られる 中国伝統演劇研究



李莉薇（中山大学）

一 はじめに

今回は、20世紀日本における京劇の受容というテーマで、中国伝統演劇、中日演劇交流に関する研究や報道について、『演芸画報』、『演劇博物館紀要』、『演劇論集』（演劇学会紀要）など演劇関係の雑誌、特に演劇総合類雑誌である『悲劇・喜劇』、『テアトロ』を中心に調査した。『悲劇・喜劇』の1947年10月の創刊号から、2010年6月号まで、合わせて716号、『テアトロ』の1934年5月の創刊号から、2010年10月号まで、合わせて839号を調べた。

二 二誌について

『悲劇・喜劇』誌は日本演劇関係の重要な雑誌の一つで、1947年秋（昭和22年10月1日）、早川書房により発行された。また、『テアトロ』も日本演劇関係に数えられる雑誌の一つであり、昭和9年5月創刊、秋田雨雀が初代編集者となった。戦争中、一時休刊となったが、

1946年10月号（8巻1月号）に月刊として復刊し、現在まで続けられている。

三 二誌から見られる中国伝統演劇研究の概況

『悲劇・喜劇』は40、50年代において、欧米の文芸思潮の影響を受けたからか、主に新劇の報道、評論を中心としていた。中国演劇関係についての内容はほとんど見られなかった。調査したところ、最初に中国演劇に関する報道は59年1月号で、中国演劇の舞台についての内容であった。60年代になって、京劇をはじめ、中国の演劇に関する紹介はあったが、ほんの少しだけであった。70年代中日国交回復の時から、中国伝統演劇に関する内容が次第に多くなってきた。80、90年代に入ってから、中国伝統演劇の報道は一段と多くなったし、中日演劇交流の新しい視点も見られるようになった。この時期において、『悲劇・喜劇』1997年8月号（N0 562号）から、1998年11月号（N0 577号）まで、12回にわたり有沢晶子が翻訳した回想文『梅蘭芳舞台生活四十年』が当誌に掲載されたことは90年代中日演劇交流の上で最も特筆すべきことだと言えよう。総じていえば、80、90年代以降すでに単なる紹介、報道にとどまらず、本格的な研究も見られてきた。

一方、『テアトロ』は『悲劇・喜劇』と比べて、比較的演劇交流を重視していると言えよう。創刊号から、『海の彼方』というコラムが設けられ、外国の演劇状況を紹介している。たとえば、創刊号に中国、朝鮮演劇の状況についての報道が見られる。また、1956年梅蘭芳の3回目の訪日公演前後、当誌も京劇の紹介に力を入れた。更に、中日国交が遮断されていた60年代においても、



『悲劇・喜劇』誌

『テアトロ』誌



京劇の現代化や革命京劇について評論や報道も数多くあった。72年の国交回復以来、中日の全面的な演劇交流が始まったと言えよう。京劇以外、越劇などの地方劇、昆劇、人形劇、話劇、雑技まで、幅広く紹介されていた。しかしながら、中国演劇研究というより、その大多数はただ紹介、披露したという段階にとどまっていると言わざるを得ない。

四 まとめ

二誌を通して見れば、中国伝統演劇及び中日演劇交流というテーマは、日本演劇研究において主要研究ではないが、文化交流の一環としての中日演劇交流も中日両国の文化交流の発展とともに、重要視されてきたということが分かった。

日中の石版画報に見る義和団事変 —『風俗画報』と『図画日報』—

福田 忠之（浙江工商大学）



石版画報（リトグラフ）は、精緻な画像を大量に、しかも低コストで読者に供給できたことから、19世紀末から20世紀初頭にかけての日中両国において大流行した。この時期の日中の画報には東アジアで起きた戦争を描いたものが少なくない。その中でも、日本の『風俗画報』（東陽堂）が出した臨時増刊号「支那戦争図会」と中国の『図画日報』（上海環球社）の特集「庚子国恥紀念画」は、1900年の義和団事変を描いた画像史料として貴重である。

「支那戦争図会」は、『風俗画報』が刊行した日清戦争の特集号「征清図会」に続く日本の対外戦争を描いた第二弾であり、義和団事変の真っ最中である1900年8月から10月にかけて全三編が刊行されている。そこには日本兵の死をも恐れない突貫攻撃や戦死の場面を描いた絵図が多く掲載されているが、重要なことは『風俗画報』のこのような絵図の多くが、将兵自身の証言や新聞報道などをもとに「想像」によって描かれたものであるという点である。このような「想像」による突撃や戦死の場面が、読者の期待通りの絵柄、構図となり、共感を巻き起こし、視覚的に国民の記憶の中に刷り込まれていく。また「支那戦争図会」の中で、注目に値するのは、日本軍の「勇壮なる挙動」や「厳粛なる規律」が列国軍との共同軍事行動の中で、如何に諸列強に認められ高く評価されたか、という点に最大の関心が払われていることであろう。義和団事変が勃発した時、日本の指導者に提起されたのは自国民の保護という問題だけではなく、列国と共に軍を派遣することにより、如何に日本の国威を列国に見せつけ、欧米列強の仲間入りを果たすかという課題が存在したのである。したがって、日本の国

家的要請としても、日本の遠征軍は義和団や清国兵を打ち負かすだけでなく、その卓越した戦功により列国軍から一目を置かれる存在でなければならなかった。『風俗画報』が「今回の事変こそ、本国の威武を示すべき好機会なり」と述べる所以である。例えば、太沽砲台へ日本軍が突撃した際の模様を伝えた報道では「（英独兵など）我陸戦隊の大打撃を見何れも舌を捲て驚嘆せざるはなかりしも無理なし」として、列国の評価を常に気にしているし、また、天津占領後の情景を描いた絵図は、日本の軍紀のよさを知った天津市民が日本の国旗を手にとって入城を歓迎し、それを目撃した列国兵たちが「驚嘆」しているという構図になっている。このように、『風俗画報』は、国威発揚、国際的地位の向上という国家的要請を過敏に感知しつつ、それに対応する視覚的イメージを作り出し、読者の視線を満足させていったのである。

「支那戦争図会」が事変発生当時のほとんどりアルタイムの報道であるのに対して、『図画日報』の「庚子国恥紀念画」の方は事変終結の約9年後に描かれたものであり、1910年1月から4月にかけて、全79図が掲載されている。清末の画報で義和団事変を論じたものとしては、この「庚子国恥紀念画」が初めてである。義和団の発生から、李鴻章による和議交渉と「辛丑条約」の締結に至るまで、かなり詳細に記されており、これを一読すれば、義和団事変の全体的な経過は大体理解できる。その冒頭では、国家的恥辱の内実を民衆に知らしめ、民衆の愛国心の高揚を図ることが謳われている。そこで求められたのは民衆による国恥イメージの共有である。特徴的なのは、「辛丑条約」という屈辱的な敗戦条約を結ばされたこの事件を「国恥」として認識しながらも、そ